

自己作文音読における初級学習者のポーズの特徴
 - 英語母語話者 4 名の縦断調査 -

石 崎 晶 子
 (2000.12.2 発表)

1. はじめに

大学のゼミや研究会で、日本語学習者の発表が、分かりにくいという印象を与える場合がある。その原因の一つとして、意味の区切りと音声上の区切りの不一致が挙げられる。谷口 (1991) は日本語教師に対するアンケート調査において「ポーズ、イントネーションは自然に身につくもので指導の必要はない」という主旨の回答があったことを報告している。しかし、先の例は自然習得が困難である可能性を示している。

明示的な指導がない場合、学習者の音声的な区切り方はどのように母語話者と異なるのだろうか。学習段階によって変化が見られるのだろうか。本研究では、これらの点を明らかにするために、ポーズに焦点を当てて、学習者の縦断的データと母語話者のデータを比較、検討する。

2. 調査方法

2.1 被験者およびデータ

学習者：都内の日本語教室に在籍する英語母語話者 4 名。(E1,E2;女性、E3,E4;男性)

学習開始から 9 ヶ月目 (初級終了まで) のあいだに、自分で書いた作文をクラスメートの前で音読したもの。〈表 1 参照〉

母語話者：日本語教師 4 名。(J1-J4; 女性)

学習者の作文を音読。E1 の作文を J1、E2 を J2、E3 を J3、E4 を J4 が読み上げた。

表 1 学習時間、作文テーマおよび主な学習項目

	学習時間	作文テーマ	主な学習項目
作文 1	約 40 時間	私の 1 週間	動詞マス形 (現在形のみ)
作文 2	約 75 時間	自由	形容詞文、動詞テ形
作文 3	約 150 時間	自由	動詞活用終了 (普通体、意向形、可能形など)
作文 4	約 225 時間	自由	初級項目終了 (待遇表現、授受、使役、受身など)

2.2 分析方法

本研究ではポーズを「1 拍以上の長さを持つ無音区間」と定義した。したがって、1 拍に満たない無音区間、およびフィラーは今回の分析の対象としない。また、破裂音前のポーズは、前の音の終了から破裂までの長さから 55ms^1 を差し引いた値を推定値とした。

分析 1 では、音読資料全体を概観し、ポーズの有無と文構造の関係を見る。

パーソナルコンピュータに音読資料を入力し、音声ソフト SoundEdit™16 2J を用いて、音声波形、スペクトログラム、聴覚印象からポーズの位置を特定。文の構造から文末、文節間 1~4、文節内の 6 つに分類し、各位置での生起頻度をみる。文節間の分類は、窪園 (1997)、海木・匂坂 (1996) を参考に、以下のような基準で行った。

大 ↑ 意味 の 切 れ 目 ↓ 小	文節間 1：当該句境界が右枝分かれ、先行句境界が左枝分かれ。 例 [[花子の 妹の]◆[青い 服]] (◆は当該句境界)
	文節間 2：当該句境界が右枝分かれ、先行句境界が右枝分かれ。 例 [花子の◆[青い◆[新しい 服]]]
	文節間 3：当該句境界が左枝分かれ、先行句境界が左枝分かれ。 例 [[[花子の 妹が] ◆作った]◆服]
	文節間 4：当該句境界が左枝分かれ、先行句境界が右枝分かれ。 例 [花子の [[青い◆模様]の]服]

分析 2 では、ポーズの位置と長さの関係を見る。

学習者は音読開始から約 1 分、母語話者は学習者が 1 分間で音読したのと同じ部分を分析の対象とした。SoundEdit™16 2J を用い、ポーズの長さを計測し、ポーズの位置と長さの関係を見る。

3 分析 1：ポーズの位置と頻度

3.1 学習者と母語話者の比較

図 1 はポーズの位置ごとの生起頻度を示したものである。これから、以下のことが観察される。

(1) 母語話者は文末に必ずポーズを置くが、学習者はポーズが入らない場合がある。

文末にポーズが入らない例を見ると、後続の文が前の文と内容的に連続している場合が多い。(／はポーズ)

例 1 5時ごろ／食料品を買いますそれから／晩ご飯をつくります <E2-作文 1>

(2) 母語話者は文節内にポーズが入ることがないが、学習者は 5~14%の文節内にポーズが見られる。特に助詞の前にポーズを置く例が目立つ。

例 2 月曜日と水曜日と／金曜日は／九段下／へ／日本語の勉強／をしに行きます

<E2-作文1>

この理由の1つとして、助詞の選択に迷い、ポーズが入ることが考えられる。

文節内のポーズは学習が進むにつれ、減少する傾向が見られる。

(3) 文節間のポーズでは、学習者も母語話者も意味の切れ目が小さいほどポーズが入る頻度が低くなる。ただし、母語話者は右枝分かれ境界（文節 1、2）と左枝分かれ境界（文節 3、4）でポーズ生起頻度が大きく異なるが、学習者はこの差が明確でない。

(4) 学習者は文節間 4 において学習者のポーズ生起頻度が高い。その内容を見ると、表 2 に示すように母語話者は並列句の境界、強調語（例：時刻、地名、学校名など）が大半を占めるのに対し、学習者は被修飾語の前、述語の前にポーズが置かれることが多い。

例 3 [もう[[日本の／生活に][だいふなれました]]] <E3-作文2>

例 4 [[去年の8月に][日本へ／来ました]] <E4-作文2>

例 3 のように、修飾語と被修飾語の間のポーズが入った場合、音声上のつながりが断ち切られる。このため、聞き手がつながりを再構築することが必要で、わかりにくいという印象を与える。

また、例 4 のように述語の前にポーズが入った場合、文末でピッチの立て直しが起きる。このため日本語の特徴である「へ」の字型のイントネーション・パタンの形成を阻害

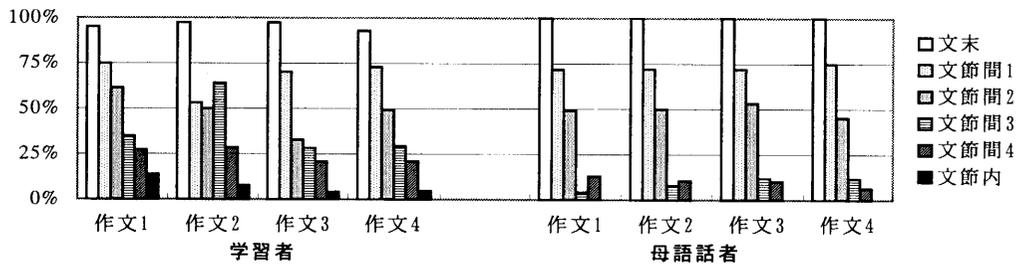


図1 位置別ポーズ生起頻度

表2 文節間4におけるポーズの内訳

	学習者				母語話者			
	作文1	作文2	作文3	作文4	作文1	作文2	作文3	作文4
並列の境界	10	2		1	5	6	2	
強調語前後	3	1	2		6	4	2	2
引用句内							1	2
助詞省略			1	1	1			1
被修飾語前	8	11	11	8		1		1
述語前	4	16	12	16			3	2
計	25	30	26	26	12	11	8	8

表3 述語前のポーズ生起頻度

	作文1	作文2	作文3	作文4
学習者	17 (27.0%)	36 (39.1%)	31 (26.5%)	38 (31.7%)
母語話者	5 (7.9%)	10 (10.9%)	7 (6.0%)	7 (5.8%)

することになる。表3は、埋め込み文を含め、資料全体で述語の直前にポーズ置かれた頻度を示したものである。述語の前にポーズが置かれる頻度が高いことがわかる。

3.2 学習者別の変化

文節間を右枝分かれ境界と左枝分かれ境界の2分類とし、学習者個々のデータを見る。図2はE1からE4の位置別のポーズ頻度を示したものである。

E1は、いわゆる目型タイプの学習者で、口が重く、学習の進み方もやや遅い。作文1では、ポーズの頻度が非常に高くなっている。学習が進むにつれポーズの頻度は下がっているが、右枝分かれも左枝分かれも同じように下がっており、両者のあいだに明確な差は現れていない。

E3は口頭表現能力が高く、学習の進度ももっとも速い。作文1²を除くと、E3の文節間でのポーズ頻度は、右枝分かれ境界では増加、左枝分かれ境界では減少してきている。

E2・E4はE1とE3の中間に位置する学習者で、作文4における左枝分かれ境界でのポーズ頻度が増加していることを除き、E3に近い変化が伺える。作文4において左枝分かれ境界でのポーズが再び増加している理由として、述語前のポーズの多さが挙げられる。増加が目立つE2の左枝分かれ境界でのポーズ20例のうち16例が述語の前に置かれている。そのうち7例は助動詞、補助動詞などが付加されている。文末表現が多様化し、まだそれが十分に使いこなせる段階に達していないことが原因として考えられる。

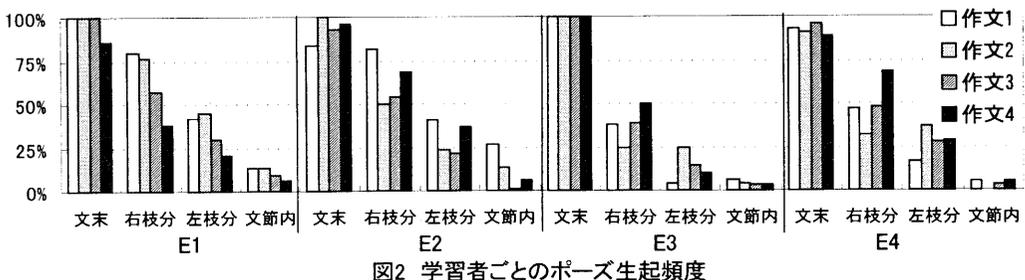
4 分析2：ポーズの位置と長さ

4.1 学習者と母語話者の比較

図3は拍を単位として見たときのポーズの位置ごとの長さを示したものである。

(1) 母語話者は文末に10拍前後の長いポーズを置くが、学習者は5拍前後で短く³、学習時間による変化も見られない。

郡(1996)は加工された音声を用いた文末判断テストから、判断の境目は8~9拍であ



ると述べている。これにもとに考えると、母語話者の文末ポーズの長さは、文末であると判断するのに十分な長さを持っているが、学習者のものは文末を判断する手がかりになりにくいと言える。また、広実（1999）は日英のニュースリーディングにおけるポーズを調べ、日本語の文末ポーズが英語の 4.6 倍と圧倒的に長いこと示している。ニュースリーディングは音読の一つの典型と考えられる。日英の差が学習者の日本語における音読にも影響を与えていると考えられる。

(2) 学習者は作文 1、2 において文節間 1 のポーズが文末並みの長さがある。しかし、作文 3、4 では短くなり、すべての位置で母語話者と同じ 2~3 拍程度の長さになっている。文の区切りとその他の区切りの間に差ができつつあると見ることができる。

4.2 学習者別の変化

学習者と母語話者の比較では、文中にあるポーズの長さは位置による差が小さい。そこで、ポーズの位置を文末と文中の 2 分類とし、学習者ごとの変化を観察する。

図 4 は、学習者ごとのポーズの長さを示したものである。

E3 の文中のポーズの長さは 4 回を通して 2.5 拍前後で、大きな変化はない。文末のポーズは、作文 1、2 では 6 拍強であるが、作文 3、4 では 8 拍強まで伸びている。E2 は、E3 ほど明確ではないが、文末のポーズが長くなり文中が短くなることで両者の間に差ができつつある。E1 と E4 は、文中のポーズは短くなっているが、文末も同様に短くなっており、文中と文末の差は小さい。

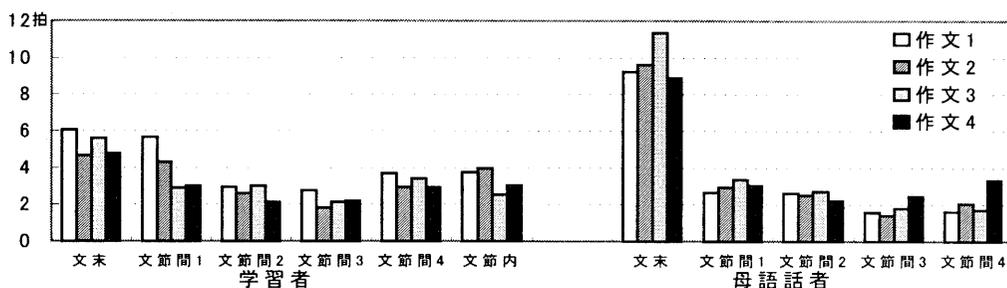


図 3 位置別ポーズ長 (拍)

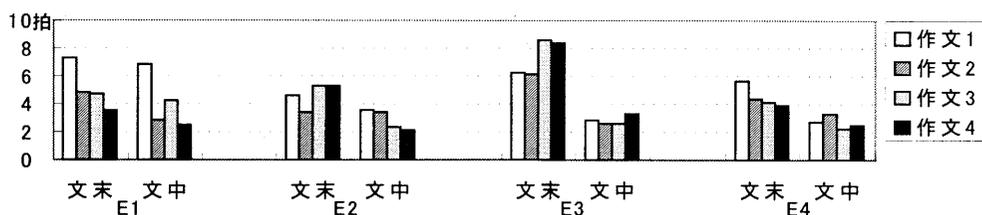


図 4 学習者別ポーズ長

5 今後の課題

ポーズは意識化することができれば、ピッチよりはるかに容易にコントロールできる。意味の切れ目を示す指標としては、ピッチの影響の方が強いという研究結果（平埜 1991）も出ているが、学習効果という点から考えた場合、ポーズの指導は十分に意味があると考えられる。実際の指導を通して効果を確認する必要がある。

また、本研究は音読を資料としたが、即時発話とどのような点で共通し、どのような点で異なるかも検討する必要があると考えられる。

注

1. 連続音として聞こえる破裂音前の無音区間の平均値。母語話者：平均 55.1ms (SD=14.0, n=64, 最大値=87, 最小値=28)、学習者 55.7ms (SD=16.2, n=48, 最大値=81, 最小値=27)
2. 作文 1 は学習開始から間もないため、内容、語彙、構文とも制限が強い。
3. 文末のポーズは、拍に換算する前の実測値でも、作文 1 から順に、学習者：1097ms, 848ms, 953ms, 851ms、母語話者：1179ms, 1205ms, 1394ms, 1079ms と母語話者のほうが長くなっている。

参考文献

- (1) 奥本みどり (1995) 「ポーズから見た英語母語話者による日本語」『日本文化研究所紀要』1、亜細亜大学
- (2) 海木延佳・匂坂芳典 (1996) 「局所的な句構造によるポーズ挿入規則化の検討」『電子情報通信学会論文誌 D-II』Vol.79-D-II, No.9
- (3) 郡史郎 (1996) 「音声の特徴から見た文」『日本語学』15-9
- (4) 窪園晴夫 (1997) 「アクセント・イントネーション構造と文法」杉藤美代子監修『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂
- (5) 杉藤美代子 (1987) 「談話におけるポーズの持続時間とその機能」『音声言語Ⅱ』（近畿音声言語研究会）（『日本人の声』和泉書院 1994 に再録）
- (6) ————— (1991) 「談話分析・発話とポーズ」『日本語学』10-10
- (7) 谷口聡人 (1991) 「音声教育の現状と問題点 - アンケート調査の結果について -」『シンポジウム 日本語音声教育 - 韻律の研究と教育をめぐって -』凡人社
- (8) 平埜雅久 (1991) 「あいまい文の意味解釈におけるポーズとピッチの役割 - 発話、知覚両レベルからこの二つのパラメータに対する依存度を探る -」『早稲田大学語学教育研究所紀要』43
- (9) 広実義人 (1999) 「日・英語ニュースリーディングにおけるポーズに関する一考察」『目白学園女子短期大学紀要』
- (10) Deshamps, A. (1980) The syntactical distribution of pauses in English spoken by French students, *Temporal Variables in Speech*, Mouton
- (11) Raupach, M. (1980) Temporal variables in first and second language speech production, *Temporal Variables in Speech*, Mouton

(お茶の水女子大学大学院)